

戸惑いと嘘

——福島第一原発とラ・アーグ再処理工場の
近くで真実について考える——

内山田 康

戸惑いと嘘

——福島第一原発とラ・アーグ再処理工場の 近くで真実について考える——

内山田 康

核兵器廃絶の戸惑い

2017年のノーベル平和賞が「核兵器廃絶国際キャンペーン」ICANに授与されることが発表された10月6日、首相官邸と外務省は沈黙を貫いた。翌朝、ICANノーベル平和賞の記事が日本経済新聞と朝日新聞の一面を飾った。前者は日本政府の沈黙について触れることを避けたが、後者の三面に「日本政府はとまどい」という記事が掲載された。「核廃絶へ向けた意義を認める一方、核・ミサイルの脅威を高める北朝鮮に触れ「遠く離れた国と、現実の脅威と向き合っている我々とは立場が違う」ととまどいを見せる外交官も」(朝日新聞2017年10月7日)。日本政府はこの日も沈黙を続けた。この「とまどい」の余波を刻印しているようだ。

核兵器の脅威から遠く離れた国(スイス)にいてグローバルな核兵器廃絶に取り組むことができる超越的な状況と、その脅威の現実の間近で直面している日本固有の状況は違うとするこの社会を支える集合意識の一端が、発話の断片に捉えられていたのか。核の脅威から遠い国と近い国、特殊な状況が無い国とそれが有る国を差異化するこの認識は、あらゆる地域に住む全ての人間が同じように被曝すると認識する核兵器のグローバルな破壊性を排除している。換言すれば、この図式において、グローバルな核廃絶の可能性は無い。核兵器から遠く離れた国と近い国という自国の特殊性に立脚した二分法は、核兵器が使われる可能性を有するこの地球に生きる全ての人間に共通するリスクを認識しない。だが、合理的に考えた時、大陸間弾道ミサイルが局地的な核兵器ではないことは明らかだ。

「遠く離れた国」と「我々」という自らの特殊性を強調するこの差別化は、政府高官の思考が混濁していることを示しているのだろうか。発話をした後で、紋切り型のコメントの論理が破綻していることに気づいて彼は戸惑ったのか。ぶら下がりインタビューに対する外交官の返答はよく考えられたものではない。繰り返し使われる口上は、考えなくても口にすることができる職業的な属性だ。この口上の論理破綻を知らながらも、政治的な理由から破綻したロジックを使い続け

ねばならない配置の中で生きる矛盾が、彼を戸惑わせたのか。官僚としての特権を失わないために、舞台の上では与えられた台本に従って発言しなければならない。抑圧された良識の記憶が作用して彼を戸惑わせたのか。

核兵器の被曝の経験がないヨーロッパではなく、人びとの日常の上にアメリカ軍が原爆を投下したヒロシマとナガサキを経験した「唯一の被爆国」とされる日本の経験を振り返ると、核廃絶の意義は理解できるのか。北朝鮮を核兵器で攻撃する能力、すなわちアメリカ軍の核抑止力に対する依存、あるいはアメリカ軍と自衛隊の一体化はかつてないほど強化されている。この統合不可能な矛盾を内包する集団の立場が、発言を求められた外交官を戸惑わせたのか。その時、日本政府はもはや核兵器廃絶ではなく、核兵器によって平和を目指す方向転換を始めていた（朝日新聞 2017 年 10 月 13 日）。

普遍／特殊の対概念を補って言い換えると、この矛盾の性格はより明確になる。グローバルな核廃絶は、普遍的な人間性を基礎とする絶対的な平和の理念に基づいた思想だ（Lefort 1992）。しかし、唯一の被爆国としての日本の経験を強調する立場は、普遍的な人間性という人類の共通基盤を前提とせずに成立する。むしろ、この唯一性は特殊性の印なのであり、ヒロシマとナガサキは人間に対する普遍的な暴力の一つの具現としては理解されていない。この政治的な想像力においては、地球上のあらゆる地域が被爆する可能性は抑圧される一方、核兵器の抑止力（すなわち生命活動に対する絶対的な破壊力）が普遍性を付与されて、平和と安全の主役になろうとしている。核兵器が（全人類の平和と安全ではなく）自国の平和と安全を保証してくれる。だが、ヒロシマとナガサキの人間性を否定する大殺戮は、アメリカ軍の核兵器によって実行された。だから、核兵器廃絶は「とまどい」なのだ。

第一次世界大戦に際して、ヨーロッパの「文明人」は未開の「野蛮人」と全く同じように仲間の死をすぐに認めようとはせず、仲間を殺すことを禁じ、身内の死を深く悼む一方で、敵を殺すことを賞賛した。死に対するこのような根本的に矛盾する態度をフロイトは「戸惑い」(bewilderment) の概念を使って考察している（Freud [1915] 1957）。この時代に、科学は冷静な公平さを失い、科学に仕える者たちは苦々しい思いを抱きながらも、敵との戦いに貢献すべく科学から武器を生み出そうとしていた。人類学者たちは敵を劣った者、あるいは退化した者であると宣言するよう駆り立てられ、精神科医たちは敵が精神を病んでいるという診断書を書いた。このような時代にあって、巨大なマシンの歯車のような戦闘員となった普通の人びとは、どちらへ向かったら良いのか戸惑いを感じていた。そして、自分の能力を使うこと、あるいは活動することを停止する。フロイトは「戦争と死の時代への思い」(“Thoughts for the times on war and death”) というタイトルの論文において、戸惑いを引き起こした二つの要素、すなわち (1) 幻滅と (2) 死に対する態度の変化について論じている。私たちは大戦中の死に対する根本的に矛盾した態度の発露において、文明人が野蛮人であったことを経験した後、どこへ向かっているのだろうか。

2017年の夏、いわき市で行われた福島原発事故に関するある研究会で予期せず起きた出来事から、広い意味における国家機構の介入によって、あるいは我々自身の手による自己検閲によって、真実の探求が困難に陥っている文明の状況について考察を始めることにする。

舞台上の涙

2017年7月29日の朝、私は常磐道を北上して福島県いわき市にある「アクアマリンふくしま」に向かった。9時過ぎに小名浜に着いて、水族館の本館1階にあるマリンシアターを目指した。その日、福島大学環境放射能研究所が主催した「海域の放射能汚染：これまでとこれから～福島県の漁業復興に向けて～」という長いタイトルの研究会が、家族連れで賑わう土曜日の水族館で行われようとしていた。6名の発表者の表題を以下に示しておこう。青山道夫（福島大学）「福島県沿岸から北太平洋域での放射性物質の長期の動き」。森田貴己（中央水産研究所）「水産物は安全なの？」。根本芳春（福島県水産試験場）「福島県における解散魚介類のモニタリング」。石丸隆（東京海洋大学）「海洋生態系における放射能汚染の推移」。重信裕弥（中央水産研究所）「底魚と海底土の放射性セシウム濃度」。富原聖一（ふくしま海洋科学館）「アクアマリンふくしまの取り組み～ふくしまの海はいま～」。アクアマリンふくしまで週末の一日を楽しむ親子連れ、カップル、孫と祖父母と子供夫婦の一行は、マリンシアターの中には誰一人として入って来なかった。中にいた人たちは、研究者、ジャーナリスト、手伝いに駆り出された学生だった。原発事故による放射能汚染の現状を浜通りの普通の人びとに聞いてもらうために、この水族館が会場となったのだが、テーマパークで憩いの時を過ごす人びとは、この催しを素通りして行った。福島海の放射能汚染について考えることと、浜通りの水族館で余暇を楽しむことの間には、見えない障壁が横たわっていた。

最初に発表した青山道夫の名前を私は覚えていた。彼は福島第一原発事故が起きた時、つくば市にある気象研究所の研究員をしていた。2011年3月12日に1号機が爆発、14日に3号機が爆発、15日には停止していた4号機でも爆発が起こった。1号機、2号機、3号機のメルトダウンはこの時起きていたが、東電はこの事実を2ヶ月間隠していた。炉心損傷が起きたが炉心溶融は起きていないと東電と政府は繰り返した。東電がメルトダウンを隠していたことを認めて謝罪したのは、5年以上が経過した2016年6月21日のことだ。原子力規制委員会は前日の6月20日、運転開始後40年以上が経過した関西電力の高浜原発1号機と2号機の運転延長を認可した。これによって東京電力の柏崎刈羽原発の6号機と7号機の再稼働へ向けた環境づくりは出来上がった。東電の立場に立てば、5年3ヶ月の日々、再稼働へ向けて粘り強く準備をして来たことがやっと報われたこの時期こそが、メルトダウンの事実を隠して来たことを謝罪するのにふさわしい戦略的なタイミングだった。

2011年3月12日の記者会見において枝野官房長官は「この度の爆発は原子炉のある格納容器内で起こったものではなく、従って放射性物質が大量に漏れ出すものではありません」と東電の見解を繰り返した。実際に何が起きているのかを知るための情報が絶対的に足りなかった。私はつくば市の高エネルギー研究所がネット上に公表していたリアルタイムの放射線量の変化をチェックしながら、子供たちをつくばから避難させることに決めた。

この時の問題は、何が事実なのか解らなかつたことだ。第一に、事実として伝えられたことの真実性と虚偽性が問題化しつつあった。第二に、事実について大本営発表に依存しなければならない状況における真実の政治性、すなわち真実と民主主義の問題が顕在化しつつあった。破損したブラックボックスを開いて隠されていた事実を知ろうとする少数の進歩主義者と、ブラックボックスを一刻も早く閉じようとする多数の保守主義者が、原発事故の事実を巡ってせめぎ合っていた。だが多くの人たちは、何が事実なのか判断できないまま、自宅あるいは避難先で事実の一部だけを知らされていた。福島第一原発30キロ圏内の僅か外側の久之浜に住む私の知り合いは、自家菜園の野菜や山菜の放射能汚染を恐れていたが、「知るのが怖い」と言って食料の放射能測定をしないまま過ごしていた。原発事故から2年半が過ぎた2013年の秋には、事故の忘却が始まっていた。東電がメルtdownの事実を隠していたことを認めたのは2016年6月だから、事実が隠されていた間に人びとは事故の忘却を始めたということだ。事実を公表しない戦略の有効性の一部がここに見ることができる。

青山は週末で休みだった3月12日と13日に研究所に出てきて放射能の測定をしている。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原発事故の時もそうだった。青山はゴールデンウィークの最中に研究所に出勤して放射能を測定していた。原発事故が起きた事実をソビエト政府が認めたのは2日後の4月28日のことだ。青山がチェルノブイリ原発事故で放出された放射能をつくばで測定したのは5月3日だった。彼はチェルノブイリ原発事故の経験があったので、福島第一原発事故の直後から放射能の観測体制を整えていた。私が青山道夫の名前を覚えていたのは、同じ市内に放射能の長期的な動きを研究している人がいて、福島第一原発事故が起こった直後に研究を続けるための予算を止められたと聞いたからだった。

青山は福島原発事故の前に核実験起源のセシウム137が地球上にどのように降ったのか、それは環境の中でどう挙動しているのか、どのような調査をして、どのようなモデルを作り上げたのかについて話し始めた。彼は核実験によって環境の中に放出された放射性物質の挙動、特に海洋の表層部と内部におけるセシウム137の3次元の分布が知りたくて研究をしてきたと話した。セシウム137の3次元分布が明らかになった結果、福島第一原発事故によって放出されたセシウムがどのように挙動するのか予想できたこと、また細かい部分においては予想と異なる結果が見出されたことをグローバルなモデルを示しながら説明した。続いて青山は原発事故がなぜ起きたのか、という質の異なる問題について語り始めた。彼は東電がIAEAと日本原子力学会の勧告を聞きいて

いたならば事故は防げていただろうと淡々と話した。事故後に IAEA のある専門家は青山に、勧告通りに確率的な安全評価に基づく対策を実施していればよかったのに、と言ったという。青山の声が突然震え始めた。顔が歪み、彼は涙を流していた。「すみません…思い出しました…」と言って彼は話題を変えた。

青山は気象庁の「放射能調査研究費」を使って環境の中に放出された放射能の挙動を研究していた。3月12日に1号機爆発のニュースを聞いて、青山はチェルノブイリ原発事故の経験を踏まえて、数日後にはつくばでも高濃度の放射能が測定できるだろうと予想した。3月15日には雨水から計測が出来ないほどの高いレベルの放射能が観測されたため、雨水を水で薄めてから計測して放射線量を推測した。3月31日、青山は放射能観測を止めるように指示を受けた。緊急事態が起こったために、放射能の観測を中止するという合理的に考えたら理解ができない政治的な決定が、文科省原子力安全課と気象庁の間で急遽決められたらしい。事実について知ることが最も必要とされた危機的な状況に際して、放射能汚染の事実を知るための手段の一つが、予算をコントロールする国家の機構によって葬られたかに思われた。しかし、青山は会計係と大学の研究者たちに助けられて、研究を続けることができたという。私はこの出来事のあらましを2011年11月7日から14回にわたって朝日新聞に連載された「プロメテウスの罠－観測中止令」で読んでいた。

放射能調査研究費が止められただけではなかった。福島第一原発から海に放出された放射能のレベルについて青山ら3人が執筆した論文は、4月には *Nature* に掲載が決まっていたが、青山は論文を取り下げようとして気象庁から圧力をかけられた。福島第一原発の港湾内の汚染のレベルは、チェルノブイリの原発事故による黒海の汚染に比べて1万倍高いことを示したグラフが問題視された。福島第一原発事故の国際原子力事故評価尺度はレベル3から徐々に引き上げられて、1ヶ月後の4月12日には最大のレベル7となった。しかし、放射性物質の放出総量はチェルノブイリの1割程度とされ、原子力安全・保安院は「レベル7は重い評価だが、チェルノブイリとは相当違う」という立場を表明した（朝日新聞2011年4月13日）。青山らの論文は、福島第一原発事故はチェルノブイリほど深刻ではないとするこの公式見解とは矛盾する数字を含んでいた。だから原発事故を政治的にコントロールすることを試みる国家が、科学者たちが原発事故の事実を理解するために速報値を公表することを試みた論文の掲載に介入した。このような情報統制の結果、我々が原発事故の事実を知るための判断材料は絶対的に不足していた。国家が事実介入すると、我々の世界の認識に関するどのような問題なのか。

これは古い伝統を持つ主権と知の問題だ。チェルノブイリ原発事故直後の1986年5月4日、東京で開催されたG7サミットの声明のドラフトにあった「事故によって放出された放射能がもたらす健康と環境への危険を深く憂慮する」という表現が削除されて「事故の諸影響について検討した」に置き換えられた（朝日新聞2017年12月21日）。原発を推進する国家は、「放射能がもたらす健康と環境への危険」に口をつぐむ必要があったのだ。原発から放射能の危険を取り除くこ

とはできなくても「放射能」という言葉を削除することはできる。我々は言葉と実在の断絶に何度も遭遇する。

私はマリンシアターの公演後に青山と会い、9月上旬に彼の新しい勤務先である福島大学環境放射能研究所に話を聞きに訪れた。福島大学のキャンパスの中でもひととき新しい環境放射能研究所で青山の研究について話を聞いた後、私は舞台の上の涙について質問した。すると青山の顔が急に歪んだ。彼は目に涙をためて「腹が立つ」と言った。そして「ちょっと頭が変なんです」と言い訳するように付け加えた。抑圧された何かが戻って来る。ある部分は説明されるが、また別の部分には言語化されず兆候として現れる。

青山が茨城県の環境放射線監視委員会のメンバーだった時、委員会は事故の直前に日本原電に対して東海2号の防潮堤のかさ上げを提言して受け入れられた。福島第一原発は、同様の提言を受けていたにも拘らず、東電は何もしなかった。青山は、科学の知見によって津波に対する対応が実施できたはずなのに、何もせずに原発事故が起きたことが悔しいと言った。そして次のように続けた。「国際社会と付き合っていると、ヨーロッパでは長い時間を要する問題の判断は、政治的に決めるのではなく科学者に聞く。判断が合理的です。放射性物質の半減期は、公理と定理の問題であって、これは政治では変えられない」。日本とヨーロッパ（例えばフランス）の原子力政策は、青山が主張するように前者は科学者の意見を聞かず、後者はサイエンスの知見を尊重するという質の差があるとは思えないが、程度の差は存在するだろう。私は9月下旬にフランスのノルマンディー地方で原発周辺の環境放射能の測定値を公表して政府に対して提言するNGOを訪ねた。

コタンタン半島のシュールな自然

2017年9月26日の朝、私はパリからカーンに向かい、郊外にあるACROを訪れた。代表のダヴィッド・ボワイエはACROの代表としてメディアを通して原発周辺とラ・アーグ再処理工場周辺の放射能汚染の事実を公表して、原子力政策に提言する一方で、NGOの活動と並行して大学で原子物理学を教える研究者でもある。彼は二つの活動を注意深く分けていた。私はダヴィッドにACROの実験室と放射能測定に使う原発周辺の土壌や福島から送られて来た試料を見せてもらった。市民放射能測定室が日本になかった頃、福島から送られて来た様々な試料の放射線をここで測定していたことを私は知った。ダヴィッドは、チェルノブイリ原発事故を契機に、原発事故がグローバルな問題だと気づいたという。チェルノブイリ原発が爆発した2日後の1986年4月28日、スウェーデンで高濃度のヨウ素131、セシウム134、セシウム137が検出された。スウェーデンの科学者たちがウクライナで原発事故があったことを突き止めた後、ソ連は隠していたチェルノブイリ原発事故を認めたのだった。ダヴィッドにとってチェルノブイリとフクシマは自分たち

の問題だ。

お茶の時間に日本から持って来たどら焼きを食べながら4人の職員と話をした。2015年に河瀬直美の『あん』が上映されて以来、どら焼きはフランスで知られるようになっていたので話が弾んだ。印象的だったのは、原発と再処理工場が立地する町や村では、田舎では見られない立派な温水プールその他のスポーツ施設が作られ、地元の人たちの多くが原発や再処理工場で働くうちに、地域の人びとが放射能の危険について口を閉ざすようになるという福島の浜通りと柏崎で聞いたのと同じような話を聞いたことだ。原子力産業にお金で買収されて心変わりをするのは日本もフランスも変わらない。様々な根拠を通して事実が明らかにされるのではなく、お金と引き換えに今までなかった合意が形成される知のドグマ化がここでも起こっていることを示している。ドグマは懐疑を容認しない。待て。ここで再度考えねばならない。それは本当にドグマになっているのか。

翌日、ボランティアのギーがACROのラボに私を迎えに来た。彼は60代半ばの身のこなしが軽やかな年金生活者で、100キロほど離れたコタンタン半島の小さな村から車を飛ばしてやって来た。ギーはフラマンヴィル原発とラ・アージュ再処理工場の周辺から土壌や水などの試料を定期的に収集している。ラ・アージュ周辺では最近プルトニウムが出ているのが気がかりらしく仲間とプルトニウムについて話している。ギーが「ラ・アージュでは放射能の危険を口にすることがタブーになっていて、学校でもそれについて全く話さない」と説明する。ACROで働きながら原子物理学の博士論文を書いているミレーヌが「タブーというよりも自己検閲ね」とコメントする。ミレーヌはなぜタブーではなく自己検閲と言うのだろう。(タブーは集団に属する全ての成員に特定のことを禁ずる超越的な力の働きを前提とするが、人はそのような畏怖の念を持たなくても、自分の利益のために自己検閲するだろう。放射能の危険はこのような意味においてタブーとはなっておらず、個々人が自己検閲を止めれば放射能の危険は再び問題にされる。EDF(フランス電力)はタブーの要となる宗教的権威ではあり得ず、再処理工場を運営するEDFの下請けのアレヴァ社はなおさらそうだ。口を嚙ませる絶対的な権威が問題なのではなく、私が問題なのだ。)

2016年10月10日付のACROの声明によれば、ラ・アージュ周辺の土壌からストロンチウム90とプルトニウム239および240に加えて、毒素の強いコバルト60、ヨウ素129、セシウム137、アメリカシウム241が検出された(ACRO 2016/10/10)。2017年3月3日のLCIニュースによれば、ACROがラ・アージュ周辺の物質から492Bq/kgのアメリカシウム241、乾いた土壌から平均200Bq/kgのプルトニウム239および240を検出した。プルトニウム239の半減期は24130年。一方アメリカシウム241のそれは432年だという(LCI 2017/03/03)。AFPによれば、ACROの報告を受けてアレヴァ社はアメリカシウム241に汚染された土を取り除いた。原子力安全局(Autorité de sûreté nucléaire)は「これは過去に起こった汚染であり、現在進行中の汚染ではない」とコメントした(AFP 2017/01/26)。ACROが放射能汚染の事実を公表すると、アレヴァ社と原子力安全局はこれを

過小評価しながらも対策を講じている。

私はシェブルールに近いヴィランドヴィルという小さな村の古い石のチャペルを改装したギーの家で、マリーが作った林檎をふんだんに使った料理を食べ、ギーが醸造したシードルを飲んだ。デザートは林檎のムースとお土産に持って来たカステラだ。チャペルの庭には、実をたくさんつけた林檎の木が数本あった。自給のための野菜も作っている。ギーの父は林檎農家だった。「原発と再処理工場さえなければ、ここはとても良いところなのだが、フラマンヴィル原発で火災が起きたし、ラ・アークはトリチウムを海に流し続け、使用済み燃料を埋めた場所は汚染されている」とギーが言う。

昼食後、ギーとマリーがフラマンヴィル原発とラ・アーク再処理工場の周囲を案内してくれた。ラ・アーク再処理工場は何重ものフェンスで厳重に守られ、監視カメラが監視している。ギーはスピードを緩めず車を走らせた。ラ・アークはその景観の美しさで知られていた。ラ・アークを調査した人類学者のフランソワーズ・ゾナバンは、野生的な海岸線と溪谷と丘陵の調和の取れた美しさの中に秘密に包まれた再処理工場が存在する不調和な景観を描いている (Zonabend 2014: 15)。「この人たちは家族の誰かが原子力関係の仕事をしている。息子、夫、父親とか、だから誰も原子力を悪く言いたくない」とマリーが言う。「なるほど。社会的な関係と原子力産業が混ざり合っているんだ」と私は相槌を打つ。「人びとのメンタリティが変わって、それが社会構造化したのね。ここには小規模の農家が多いから、これは完璧に…シュールな自然だわ」とマリーが言葉を探し出す。ギーは再処理工場の様々な施設がフェンス越しに見えるに道を北上しながら「景観がすっかり変わってしまった」と呟く。ギーはフェンスの向こう側に見える盛り土を乗せた構造物を指差して「以前、放射性廃棄物を貯蔵するサイロがあったが、火災が起きて防水性に問題があったために水漏れして、それで今はこの施設に放射性物質を貯蔵している。そこからプルトニウムが漏れているんだ」と言う。そこからさらに北に進んで東側に柵に囲まれた再処理工場、西側に大西洋を見渡すジョブールという村の外れでようやく車を止めた。

緩やかな丘陵が続き、生垣には木苺が生えている。「この景色はウェールズに似ている」と言うと、「ウェールズがノルマンディーに似ている」とギーが応答する。スマートフォンの画面に《bienvenue à Grande-Bretagne》「ようこそグレートブリテンへ」と表示が出ている。ここはまだフランスなのにコタンタン半島の先端は、フランスの生活圏から遠く離れている。再処理工場の敷地からフェンスの外へチョロチョロと水が流れている。カエルがいる。牧草地に放牧された牛がこちらを見ている。ギーがここで採取した土からプルトニウムが出たと教えてくれる。私はウクライナ製のガイガーカウンターで湧き水の周囲の空間線量を測り始める。0.25 … 0.27 μ Sv/h … マリーが覗き込む。ギーが「これはセシウムだ。プルトニウムはこれでは測定できない。線量がものすごく低いんだ。プルトニウムというのはほんのわずかでも、とてもとてもとても毒性が強いん

だ」と言う。個人用のガイガーカウンターを持ち歩いて空間線量をこまめに計測しても、プルトニウムを知覚することはできない。だからギーたちが定期的に再処理工場の周囲を巡って ACRO のラボで分析するための試料を定期的に集めていることは、我々の環境の放射能汚染を知る上で重要な意味を持っている。その日のうちにカーンまで戻らねばならないので、20 キロほど離れたシェルブールへ向かった。

私はギーとマリーとシェルブールの港を見下ろす《Musée de la Libération》「自由博物館」に続く坂道を登って行く。雨が降っている。グレートブリテン島と同様に、ノルマンディーは雨が降ることが多い。だから『シェルブールの雨傘』（1964 年）の舞台はこの街の傘屋だった。愛ではなく生活の安定を選んだあのメロドラマの展開を覚えている人も多いだろう。お金のために大切なものを犠牲にした人びとの切ない悔悟。だが、後戻りはしない。『シェルブールの雨傘』の主題は、原子力産業に依存して豊かな生活を送ろうとして生きてきた人びとの葛藤と、同じ形をしている。ギーとマリーは受付にいた男女と知り合いらしく、お互いどうしていたか楽しげに話している。閉館まで時間がないので駆け足でノルマンディー上陸作戦の展示を見た。今では寂れているがここは軍港の町だった。ノルマンディー上陸の激しい戦いがあり、第二次世界大戦後に軍港として栄えた後に衰退した。ラ・アーグ再処理工場は 1960 年代には核兵器を作るための工場だったが、1970 年代に入って核燃料再処理工場となる。またこの頃、フラマンヴィル原発の建設が始まった。激しい反原発運動が起きたが、今ではその記憶は薄れている。コンタンタン半島の先端に位置するシェルブールは軍港として栄えた歴史を持ち、戦後は原子力潜水艦が作られ、近くのラ・アーグでは核兵器用のプルトニウムが生産された。シェルブールは軍港、核兵器の製造、使用済み核燃料の再処理工場、原子力発電所など軍事産業と原子力産業に依存して存在してきた田舎町だ。

大量のトリチウムがラ・アーグ再処理工場から海に流されている。ASN（原子力安全局）の『トリチウム白書』（2016）は、トリチウムを海に放出することにより、これを大気中に放出する場合に比べて、格段にその潜在的なリスクを減じることができると主張する。トリチウムを気体として放出する場合のインパクトは、液体として放出する場合の 1000 倍となるという比較を用いて、トリチウムを海に放出していることを安全の観点から正当化している（ASN 2016: 206-207）。ラ・アーグ再処理工場を運営するアレヴァ社と協力関係にある研究者たちの報告によると、2014 年には 78TBq のトリチウムが大気中に放出された。これはフランスで大気中に放出されたトリチウムの 25% に相当する（Connan *et al* 2017: 184）。再処理工場周囲の環境にはトリチウムが存在しているが、その 85% は HT（トリチウム水素）の化学形であるという。すなわち、ラ・アーグ再処理工場周辺の大気中に存在しているのは、毒性の高い HTO（トリチウム水蒸気）ではなく、最も放射性毒性が低い HT の化学形だと彼らは結論づけている（Connan *et al* 2017: 192）。相互に補完し

合うこれらの研究によれば、毒性の高いHTOは海に放出されるため、大気中に放出された場合よりも安全であり、再処理工場の周囲に存在するトリチウムの大部分は、毒性が最も低いHTであると結論づけられている。原子力産業と共生関係にある研究者たちの論文では、より危険なものと比較するレトリックを使って「より安全」という結論が導き出されている。ラ・アークの人は放射能の危険性について口を噤んでいる（Zonabend 2014）。

再処理工場の周辺は、そこに住む人びとにとって安全な場所なのか。ラ・アークの10キロ圏内では、子供の急性リンパ性白血病の患者数が、10キロ圏外よりも多い事実が報告されている（Guizard *et al* 2001）。だが、再処理工場から放出される放射性物質と白血病の因果関係を証明することは難しいだろう。

富岡町の取り壊された家

2017年10月30日。月曜日の5限の講義を終えた私は、夜の常磐道をいわき市へ向かった。明日31日は一日時間が空いている。翌朝に小名浜漁港に立ち寄ってから富岡を訪れて夜にはつくばに戻って水曜日の朝の仕事の準備をする手はずを整えて常磐道を北上した。2011年3月の震災直後、常磐道は歪み、ひび割れ、段差があり、片側通行の箇所がたくさんあったが、今ではいわき駅前まで途中で休まなければ2時間弱で行くことができるはずだ。いわきでは、フランスから調査に来ていた地理学者と会うことになっている。しかし、疲れて眠くなり途中で休んだために、いわき駅前まで2時間以上かかってしまった。

翌朝早く小名浜漁港へ行くと漁船は少なく、魚市場の前も閑散としていた。そこから国道6号線を1時間10分ほど北上して、富岡町役場前で富岡出身のIと植葉町出身のFを待った。Iはいわき市にある福島県復興公営住宅に住んでいる。原発事故の避難者たちが入居する県営復興公営住宅と、津波の被害者たちが入居する東隣の市営復興公営住宅の間には、賠償金の有無に根ざした経済格差があり、「市営住宅の人たちはかわいそうだよ」とIが言う。Fは昨年までいわき市中央台の仮設住宅に避難していたが、今では植葉町の自宅に帰還している。二人は無期限に休校となった浪江高校の同級生だ。朝10時、富岡町役場の駐車場は車がいっぱい駐車できるスペースを見つけるのが困難だった。富岡町は帰還した人は少なく閑散としているが、作業員の数は非常に多い。

富岡町では2017年4月1日に福島第一原発に近い区域を除いて避難指示が解除されたのと同時にショッピングセンターがオープンした。ショッピングセンターの中にはホームセンター、ドラッグストア、スーパーマーケットが入っている。工事関係者にとって必要なものは大体ここで揃う。お昼時には、作業員たちが弁当を買いに来ている。だが、普通の人たちが買い物する姿はほとんど見られない。富岡町は8月から町内だけで使えるプレミアム商品券を売り出して、帰還を促し

町内の商店を支えようとしている。1万円の商品券のセットで1万5千円分の買い物ができるが、購入した本人しか使えない上、翌年の1月末までしか使えないために使い勝手が悪い。ショッピングセンターの同じ建物の裏側には、富岡町商工会議所、富岡町3.11を語る会などの事務所がある。

私たちは富岡町3.11を語る会のNに話を聞きに行った。事務所の黒板には語り部の仕事がびっしり書き込まれていた。日本の各地から富岡に被災地ツーリズムにやって来る。大学、高校、地方自治体、企業、旅行会社のツアーなどが団体で訪れる。4月1日まで15歳未満は富岡に入ることができなかったため中学生は来ないという。そのような被災地ツーリストたちに聞かせるために作文した震災の語りを聞くことは避けたかった。Nはすぐに私の希望を理解して、ざっくばらんに現在の町のこと、帰還のこと、安全の基準のことなどを話してくれた。彼女の実家は富岡の商店街にある時計屋だったが、両親は避難先のいわきに家を建てた。Nと弟は埼玉に避難している。彼女は語り部の仕事がある時は富岡にいるという。

Nは首のない自分の雛人形の写真をを見せてくれた。避難している間にネズミに食われてしまった。家の中にはハクビシンも入って来る。2017年に休校になった富岡高校に生徒たちが自分の持ち物を取りに行った時の話になった時、Iは自分の娘のカバンと制服が双葉高校の校舎に残っていると聞いた。Nが「双葉は放射線量が高いから校舎には入れないね」と相槌を打つ。富岡高校は、ゴルフ、バトミントン、サッカーが強くて、新聞に生徒たちの活躍が載ると町民は喜んだものだが、高校は無くなってしまった。NとIが交互に話している。話題はイノシシやイノシシよりも豚に近い巨大なイノブタや数が増えたキジに移る。私は年間被曝量が20mSv以下になった区域の避難指示が解除されている点について聞いてみた。Nは次のように話し始めた。「私たちは感覚的には、やっぱり年間1ミリが本来の形だと思っているので、20ミリはあくまでも緊急時の数字なので、だからそれに合わせて避難指示を解除するってゆうのはちょっとどうなのかなあって、ただあのう会の約束で、行政の批判をしない、政治的な発言をしない、と言うルールがあるので、私の独り言です」。Iが「ここに来るのは自己責任なんですよ」と続けると、Nは自己責任について更に話を続けた。「私たちは(2011年)3月12日から自己責任です。だって町役場の指示に従わないで一万人以上の人間が自分たちの判断で避難先決めて逃げたわけですから。もうその時から自己責任です。私たちは」。続いて、放射線量の話になった。Iによると富岡町は北の線量が高い。Nが詳しく説明してくれる。除染をして線量が下がったところもある。台風が来ると線量は一時的に下がるけれど、放射性物質が低い土地に流れ込んで最近線量が高くなったところもある。新しいホットスポットが生まれている。Iが「0.23にこだわっている人は、除染しても線量が下がらないのでがっかりします」と言う。

環境省によれば、年間の被曝量1mSvは0.23 μ Sv/hに相当する(木造の家屋内に16時間いて屋外に8時間いたと想定した場合)。Iが続ける。「うちの線量は0.62。そこで住めるかと言われる

と…敷地内にもっと高いところもある」。昨年Iの家を訪れた時、庭の柚子の木の根元の空間線量はおおよそ4 μ Sv/hだった。この日、Iの家では解体作業が続けられていた。

Nが解体されている家の除染について次のように説明した。「以前は解体する家も除染の対象になっていたんです。それが除染しなくても良くなってしまったんです。そうすると、このお宅が除染したとしますよね。でもこっちは解体するので除染してない家があります。この除染してないところを解体すると線量（放射性物質）が飛び散って、除染したお隣まで線量が高くなるってことも起きています。埃で溜まっていたものが、ぱーと飛び散って。この1、2年は以前とは違うことが起きています」。Iが続ける。「環境省は20ミリだったら除染はもうそれくらいで勘弁してくれって、それはおかしい。町の方針は限りなく1ミリに近くなんだけど。だめだね」。Fが「Nさんは帰って来るのか」と聞く。Nは歯切れが悪い。両親は帰って来ない。弟も帰って来ない。自分一人でここに住む気持ちにはなれない。でも家は壊していない。Fが言う。「まだ固定資産税がかかっていないから。でも固定資産税がかかるようになったらまた考えなくちゃならないね」。Iが自分は涙流して解体の判子を押したと言って「帰って来る人もいないし…」と続ける。その帰って来ない人とは、避難している間に離婚した妻のことだ。

3月12日にはすぐに帰れると思って皆避難した。しかし避難した先で、状況がどんどん悪くなって行った。皆何が起きているのかよく解らなかつた。ところがNによると内部の情報に通じていた一部の人たちは、すでに3月11日の夜中には、福島第一原発が危険な状態にあることを知っていた。その人たちは周りの人びとがパニックに陥らないように「皆ただヒソヒソ話していた」。Iは「建屋の中で配管がバラバラと落ちて来て、燃料プールの水もぼちゃぼちゃと溢れて来て、もうだめだと思って逃げて来た」と作業員から聞いた時、第一原発が危ないことを知った。使用済燃料プールの水を浴びた人もいたとNが言う。

その場にいた三人のうち、家に戻ったのは楯葉町のFだけだ。Fは60代半ばで2016年の暮に妻と家に戻った。二人の息子たちは帰って来ない。Iは小名浜の復興公営住宅に一人で住んでいる。一人娘は4月から仙台で助産師として働いている。Nは埼玉県に住んでいて語り部の仕事がある時は富岡にやって来る。三人は原子力産業の秘密を隠さねばならない事情を持たず、知っていることをすぐに教えてくれた。疑問に感じることはおかしいと声に出して言う。商店街の外れの方にNが生まれた時計屋の建物があった。その近所でも家が解体された後に現れた空き地が、人気のない街並みに穴を開けていた。

IとFが高校時代に通った浪江町を案内してくれた。帰還が始まり、漁港が整備され、復興拠点が作られることになっているが、富岡と同じように町に人気はない。二人は高校時代の同級生の話をしているが、その人も今はいない。私たちは夕方5時頃に富岡町役場に戻ってきた。駐車場に戻ると文化交流センターから様々な作業服を着た人びとが書類の入った紙袋を持って出て来た。彼らは福島第一原発の構内で働くための講習を受けていたらしい。国道6号線はいわき方

面に帰る車で渋滞していた。

実在と真実

真実は現象の背後に隠れているのか。合理主義者ならばそう考えるだろう。プラグマティズムの真実は、出来事と共に展開する。真実はア・プリオリに存在しない。それは経験主義的に見出されるものだ。ウィリアム・ジェームズの真実は我々の思考と行動に役立つものであり、それは出来事である (James 1907)。だが、プラグマティズムの真実は誤認されてきた。役に立つものが真実だとしたら、コンセンサスも真実なのか。コンセンサスは権力によっても、贈与によっても作り出すことができるではないか。そうではない。真実は実在が与える制約と実証の試練に勝ち残ることによって、また多くの人びとがこれを信じることによって、真実として生き残る。真実を支えるのはこれに制約を与える実在とこれを受け入れる信仰だ (Tiercelin 2014)。

2013年9月7日、ブエノスアイレスで開かれた国際オリンピック委員会の総会で、安倍首相は福島第一原発から海に流出する汚染水に言及して「状況はコントロールされている」と断言した。それが東京オリンピック招致に役立つパフォーマンスだったのは確かだ。この発言は真実だったのか虚偽だったのか。ジェームズの真実は、実在が与える制約との関係によって真実となる。この時も福島第一原発の港湾内か高濃度の放射性物質が検出されており、東電は汚染水の流出を認めていた (朝日新聞 2013年9月13日夕刊)。言説の外側にある実在が、この言明を制約していたと言うことができる。安倍首相の言明は科学の実証の試練に耐えるものではなかった。では、人びとはこの言明を信じたのか。私が話を聞いた小名浜の人びとは、首相の言葉を誰一人として信じていなかった。ある料理人は「汚染水は沖に流れて海水で薄まっているんだろう」と私に言った。小名浜ではこれがコンセンサスだったと思う。「pである」と言明される。実在はpではない。ならばこの言明は真実ではなく虚偽だ。この言明は実在と信仰によって支えられていない上、コンセンサスにもなっていないかった。真実を求めることは放棄されていたと考えられる。

2017年10月に日産自動車が完成検査を長年にわたって偽装していたことが明らかになった時、国土交通省の反応に関する新聞記事が目にとまった。「検査は本来国がすべきものだが、大量生産を可能にするため、各社が認定制度を設けて信頼性を担保し、「代行」する仕組み。国交相は検査に不備がないか定期的に監査しているが、書類を信頼して行われており、書類自体が偽装された場合、不正を見抜くことは難しいという」 (朝日新聞 2017年10月8日)。引用の最後の部分、すなわち「書類を信頼して行われており、書類自体が偽装された場合、不正を見抜くことは難しい」は何を指示しているのか。これは行政機関が墮落した「真理対応説」 (“the correspondence theory of truth”) を採用して仕事をしていたことを示している。

検査結果と実在は対応しているという建前で認定制度の代行が行われているが、国土交通省は

この対応を検証せずに書類だけを監査して、偽装された書類を信頼していたと説明する。「書類自体が偽装された場合、不正を見抜くことは難しい」とするこの立場は、スピードと引き換えに真実を求めることを放棄してもなお「信頼」を装って仕事を回し続ける欺瞞の認識様態を示している。言葉と実在は対応しておらず、彼らは言葉だけをチェックし続けた。プラグマティズムの観点から見れば、彼らは仕事をするための適正能力を欠いている。もしも彼らが実証主義的な社会科学を日常的に実践していたならば、言葉だけを「信頼する」悪質な良心 (bad conscience) に従う姿勢を改めていただろう。ここで問われているのは、規則あるいは形式の一般性ではなく、個々の事実の特殊性だ。ゆえに、合理主義ではなく、実証主義の気質が必要となる。事実から乖離した神学的なア・プリオリは、たとえ居心地が良かったとしても役には立たない。ある一つの真実の真実性は、制約として働く他の諸真実との関係において、更にはその検証可能性によって決まる (cf. James 1907: 72-73)。

言葉と世界の間には存在しない橋を想定する背徳的な真理対応説は、日本社会のあらゆるところに姿を顕わしている。築地市場の水産仲卸業者が、移転先の豊洲市場の土壤汚染問題を収束させるために、小池知事に「安全宣言」を要請した出来事にもこの構造が現れている (朝日新聞 2017 年 9 月 8 日)。東京都知事が「安全宣言」することによって、すなわち社会構造の上からドグマを宣言することによって、豊洲市場の土壤汚染の事実はどう変化するのか。ドグマは、自然科学、社会科学、人文科学によってその真実性・虚偽性が検証されるのか。それとも「安全宣言」を契機に汚染問題に幕を下ろして、場面転換を計ろうとしているのか。ならば我々はこれ以上お芝居を見ることはやめにして、フィールドワークを始めよう。

時間の制約があるため、私はジェームズの真実と対話を続けることができない。筆を置く前に、上の三つの事例に登場した青山、ギー、Nらの真実に対する態度を振り返っておこう。科学者の青山は、事実を追い求めている。それは環境の中に放出された放射性物質の挙動についての事実であり、青山はセシウム 137 の測定値という目印を実証主義的に検証することを通して、環境に放出された放射性物質の実在を構築しようと試みている。暫定的な研究結果を研究者たちと広く共有することで彼は目標に近づくことができる。青山はこの過程において虚偽を言明して戸惑うことはないだろう。

ギーはラ・アーク再処理工場とフラマンヴィル原発の周囲で放射能測定のための試料を集めているボランティアだ。彼は放射能汚染の事実を公表するために活動を続けている。なぜそうするのか。原子力産業が利益を守るために公表しない事実を公表して共有することを通して、生活の場の間近にある原子力発電所と再処理工場の実在をより良く認識するためだ。彼は余裕のある年金生活者であり、原子力産業に依存する理由を持たない。彼らの活動によって原子力産業が構築した実在の真実性が揺るがされて、修正が求められることがある。彼もまた虚偽を言明する利害を持たないので、戸惑うことなく活動している。

Nは避難先から富岡町に通いながら語り部として活動している。彼女は国の帰還政策に対しては疑問を抱いているが、これを抑圧しようとはしない。Nは避難指示解除の基準となった年間積算線量 20mSv は緊急時の基準であって、帰還してこれから毎日暮らしてゆかねばならない人びとの基準としてはふさわしくないと考えていることを隠さない。Nは国家の原子力行政のマウスピースとなってドグマを語ろうとはしない。だから彼女の語りは率直であり、その自発的な態度に戸惑いはない。

2017年は言明の真実性が実在の試練の前に崩壊する出来事が続いた。安倍首相の森友・加計問題、神戸製鋼の検査データ改ざん、日産とスバルの検査偽装、商工中金の全支店で行われていた不正融資。直後に自民党は総選挙で圧勝した。その後も三菱マテリアルが検査データを改ざんしていたことが明らかになる。そして東レが続いた。我々は真実を問題にしなくなったのか。ジェームズの真実の実在と信仰の試練を受けるが、この社会は利益と引き換えに真実を問題にしなくなったのか。我々は短期的な利潤と効率を追求する巨大マシンの部品になってしまったのか。公共にとっての真実を求めるより、身内の利益のためには嘘をつくことも厭わない戦略をいつまで続けるのか。このマシンは既に壊れているのではないか。

2011年3月11日の津波の数ヶ月前に防潮堤のかさ上げをしていたおかげで電源喪失を免れていた東海第二原発を保有する原電が、1800億円の廃炉資金を敦賀3号機と4号機の建設費に流用して187億円しか残っていないことが判明した。原電は廃炉の費用がないために、40年稼働した東海第二原発の20年間の運転延長を申請していたが、そのために1700億円を超える安全対策費を調達する必要に迫られていた（朝日新聞2017年11月17日）。

私が勤務する大学は、社会科学と人文科学を切り捨てている。我々は増え続ける仕事に追われ、事実を明らかにすること、実在を求めること、実在を使って真実をテストする仕事ができなくなりつつある。慢性的に時間に追われ、職場では経営効率を上げるために形式上のプログラム化が進められ、熟練技能は消えてゆくだろう。余裕がなくても生産効率を上げることが求められる。言葉と実在の乖離が日常的に起きている。上に挙げた不正の多くは、余裕がなくなった組織のこのような慣行から生じている。真実を抑圧して虚偽を言明する所では戸惑いが生じる。（だが、日常的に虚構に生きていると、戸惑いも無くなるのかもしれない。）科学は偏狭な利益と効率に奉仕するためにあるのではない。学問の営みは、事実と実在と真実を探求するために続けられねばならない。我々に希望はあるのか。抑圧と戸惑いのある所に希望はない。真実が求められる所には希望がある。上から与えられたドグマを表面的に信仰するだけの思考しない臣民として生きるのではなく、真実が実在の試練を受けながらコンセンサスとなるように自律的に活動しなければ、我々の科学に未来はない。

実在が揺らぐ

2017年11月20日。講義が二つと卒論指導が夜遅くまで入っていた月曜日の朝、環境放射能を研究する天野光が私の研究室に顔を出した。彼は環境の中に放出された放射性物質の挙動に関するいくつかの論文と報告書を持ってきてくれた。天野が帰った後、私は彼に完成前の「戸惑いと嘘」の原稿をメールで送った。日本原子力研究開発機構の研究員だった天野は、原発事故の直後に小名浜に生まれた「いわき放射能市民測定室たらちね」を支える市民科学者でもあった。国家主導の巨大な原子力開発研究プロジェクトで働き、市民が主体的に放射能測定をする小さなラボで放射生態学を実践することは何を可能にするのか。

天野が日本原子力研究所の研究員だった頃、『原子力 eye』に寄稿した「環境負荷物質陸域移行コード「MOGRA」という共著論文の中で、放射性物質が拡散することによるリスクに言及した部分を、リスクが「極めて小さいにせよ」とするように共著者から言われて、しぶしぶ書き足したという。「原子力発電の恩恵を受けることは、事故等によって放射性物質が生活圏に拡散することによるリスクを、極めて小さいにせよ負うこととなる」(天野、高橋、内田 2002年)。「リスクを負うこととなる」の表現が持つ言葉の力が取り除かれて、言葉の上で放射能のリスクは取るに足らないレベルに下げられた。このような検閲の圧力は、原子力コミュニティのモラルティーの一部となっている。既に見たようにチェルノブイリ原発事故の直後に開催されたG7の声明から「放射能」の言葉が削除されていた。ラ・アークでも放射能の危険性について人びとは口を噤む。しかし、福島原発事故が起こり、天野はこの時の事を後悔している。彼は私の原稿を読んで気になった点についてコメントを送ってきた。そのうちの4点だけを私が理解できた範囲で以下に挙げておく。

1. IAEAの勧告は、「確率論的安全評価」というリスクの確率から安全性を評価する手法を採用している。これは「ラスムッセン報告書」(1975年)に依拠しており、この報告書は過酷事故が起こるのは10万年に1度の確率だと想定していた。しかし1979年にスリーマイル原発の炉心溶融事故、1986年にはチェルノブイリ原発事故が起こり、学界では既に破綻した安全評価法だった。だから青山の発言とされる「東電がIAEAと日本原子力学会の勧告を聞きいていたならば事故は防げていただろう」という記述が気に掛かる。(IAEAの勧告が「ラスムッセン報告書」の基本的な考え方に依拠している事実には、原子力事故のリスクに関わる構造的な問題がある。)
2. 福島第一原発の非常用電源は地下にあった。これは米国の安全基準に従って竜巻対策として非常用電源を地下に置いていたためである。福島第一原発の現場の技術者たちは、津波で非常用電源が不作動となるリスクを知っており、防潮堤のかさ上げを上申ししていたが、上層部は対策を怠っていた。日本では原子力学会ではなく、土木学会が巨大津波の発生の可能性を既に提言

していた。(原子力業界は外部の研究者の提言に耳を傾けるべきだ。)

3. 原発事故の後、気象研究所、放射線総合医学研究所、原子力研究開発機構など国立の研究機関の研究者は、個人の意思で福島に立ち入る事を国家によって禁止されていた。(だから市民科学者として活動することが重要になる。)
4. トリチウムを気体として放出する場合のインパクトは、液体として放出する場合の1000倍となるという主張の根拠が理解できない。カナダでは、湖に放出するよりも、大気中に蒸発させて放出する方法を採用している。またHTはHTOよりも安全であるが、HTとして放出されたトリチウムが、微生物の作用によって地表環境の中でHTOに変換することが知られている。(環境の中で不断の創発が起きている。だから静的思考ではなく動的思考によって環境の中に放出された放射性物質の挙動を考えねばならない。)

私を取り上げた実在の真実性は、異なる形の実在の試練を受けて揺らいでいる。私の思考は試練を与えるフィールドの中で鍛えられるが、このコメントは統一を破り、私のエッセイが調和の取れた結論へ向かうことを許さない。だが、西田幾多郎が思惟したように、不統一から新たな意味と判断が生まれる。

分配される人間性

プラグマティズムの実在は実証主義的な過程の中から現れ続け、それは諸実在の試練を受ける。その存在様態は常に特殊であり、諸実在の試練を受けて真実性を獲得したとしても、合理論の普遍に変換することはない。先にクロード・ルフォールに言及して導入した普遍／特殊の対概念は、一見してプラグマティズムの実在とは矛盾しているように見える。自然、精神、神を導入せずに、個々の人間、個々の文化、個々の社会の特殊性は、普遍を見いだすことができるのか。

冒頭の核兵器廃絶の事例に立ち返るならば、個々の社会や個々の国家の特殊性を超えた普遍的な平和をどのようにして考えることができるのか。ダンテは『帝政論』において、神の摂理に従う皇帝による世界統治を考えるが、ルフォールはこのヨーロッパ中心主義的な普遍を退ける。深く立ち入ることはできないが、カントの『永遠平和のために』についても、ルフォールはそのまま受け入れようとはしない。カントが問題にしているとルフォールが考えるのは、地球上の限られた地表の隣接した場所で人間が増加した結果、引き起こされた戦争を契機に創発する人間の権利である (Lefort 1992: 244)。

ルフォールを触発したのは、世界恐慌の直後の1931年に出版されたポール・ヴァレリーの『現実の世界への眼差し』だった。その時、世界は第二次世界大戦に向かって突き進んでいた。ヴァレリーはこの政治的なエッセイの中で「限りある地球の時間が始まる」(《Le temps du monde fini

commence 》) と記す (Valéry 1931: 35 ; Lefort 1992: 245)。この限りある地球の時間が始まる時、限りある地球の表面で、戦争が当たり前のようにして起こるこの状況の中で、ヴァレリーは普遍的な平和の可能性を、今ここで見出そうとしている。我々は特殊な文化と社会に生きているとしても、この限りある地球の時間が始まる時、人間は類として我々を超えて分配されている。人類学と現象学から世界の見方について学んだルフォールは、進化の速度を早める文明が発展するこの限りある場所の出現を契機に、死の衝動が世界を人間の墓場にしてしまわぬよう、エロス (愛の神) になぞらえた普遍的な平和を目指す政治的プロジェクトに我々を誘う。その見方に倣えば、核兵器と原子力産業が平和をもたらすとする国家プロジェクトは、偽装された死の衝動に突き動かされている。巨大なマシンにいかに急かされようとも、東の間の静けさを見つけて、歩むべき道を見極めねばならない。だが、媒介され媒介し媒介される超有機体であり部分でもある「私」は、システムの制約、そしてその内側と外側を横断して現存する多様な潜在性とその諸関係において、どのような判断と実演の可能性を持っているのか。

参考文献

- ACRO 2016. La pollution à l'américium-241 augmente dans le nord-ouest du site Areva-La Hague : jusqu'à 80% en 7 ans pour ce radioélément particulièrement radiotoxique. <http://www.acro.eu.org/wp-content/uploads/2016/10/RAP1607209-Ru-des-Landes.pdf>
- AFP 2017. Areva reconnaît une pollution après de son usine de la Hague. <http://www.20minutes.fr/planete/2003655-20170126-areva-reconnait-pollution-pres-usine-hague>
- 天野光, 高橋知之, 内田滋夫 2002. 環境負荷物質陸域移行予測コード「MOGRA」, 『原子力 eye』2002年6月号 pp.69-73.
- ASN 2016. *Livre Blanc du Tritium : Groupe de réflexion menés de mai 2008 à avril 2010*. Paris : ASN.
- Connan, O. et al. 2017. Atmospheric tritium concentration under influence of AREVA NC La Hague processing plant (France) and background levels. *Journal of Environmental Radioactivity*. 177 : 184-193.
- Freud, Sigmund [1915] 1957. Thoughts for the times on war and death. In *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. London : The Hogarth Press.
- Guizard, A-V. et al. 2001. The incidence of childhood leukaemia around the La Hague nuclear waste reprocessing plant (France): a survey for the years 1978-1998. *Journal of Epidemiological Community Health*. 55: 469-474.
- James, William 1907. *Pragmatism: A new name for some old ways of thinking*. New York : Longmans.
- LCI 2017. Manche : du plutonium retrouvé autour de site nucléaire Areva de La Hague.
- Lefort, Claude 1992. L'idée d'humanité et le projet de paix universelle. In *Écrire : à l'épreuve du politique*.

Paris : Calmann-Lévy.

Tiercelin, Claudine 2014. *The Pragmatists and the Human Logic of Truth*. Paris : Collège de France.

Valéry, Paul 1931. *Regards sur le monde actuel*. Paris : Delamain et Boutelleau.

Zonabend, Françoise 2014. *La presqu'île au nucléaire : Three Mile Island, Tchernobyl, Fukushima et après ?*
Paris : Odile Jacob.

朝日新聞 2011年4月13日「放出長期化を重大視」.

朝日新聞 2011年11月7日～11月23日「プロメテウスの罫－観測中止令」.

朝日新聞 2013年9月13日夕刊「汚染の水、海に流出か」.

朝日新聞 2017年9月8日「豊洲安全宣言を仲卸業者求める」.

朝日新聞 2017年10月7日「日本政府はとまどい」.

朝日新聞 2017年10月8日「偽装用印鑑帳簿で管理」.

朝日新聞 2017年10月13日「核廃絶への表現後退」.

朝日新聞 2017年11月17日「原電の廃炉費大幅不足」.

朝日新聞 2017年12月21日「G7、反原発の機運警戒」.